

保津川の水運

京都の西側の山中を南に向かって13キロにわたって流れる保津川は1200年以上この地域の水運に欠くことができなかった。もともとは材木を運ぶために使われ、京都、ひいては大坂までの物流に大きな役割を果たした。しかし、19世紀の終わりには水運事業は鉄道に取って代わられることとなった。

記録に残っている最も古い保津川の利用は784年にさかのぼり、筏師と呼ばれる熟練の人たちが現在の京都府南西部の長岡京に新しい都を築くための材木を運んだとある。しかしながら、

1606年に開削で川が広げられるまでは船の運行は不可能だった。開削計画は現在のベトナムをはじめとする近隣諸国との交易で莫大な富を得た商人の角倉了以（1554－1614）が代表となって進められた。5ヶ月間の計画を資金的に支え、了以は農民、商人、地域の有力者に利益をもたらす国内の物流業にどんどんと参入していった。保津川を定期的に往復した船は京都に材木や物資、丹波の米（現在の亀岡）を運んでいた。現在は、旅行者を運んでいるが、船の航行自体は続けられている。

保津川が船で通れるようになってからも、地元の筏師は筏の使用をやめようとはしなかった。そこで了以は、地元の農民たちに船の作り方や操舵技術を教えるために、船大工や船頭を嵐山に連れてきた。川を下るために船頭たちが開発したのが、400年前に考案されて以来、今も変わらない3つのポジションを採用した特殊な操船方法である。